千年屋あやかし和菓子帳
無気力店主はあやかし事件に巻き込まれ中

椿　蛍 Hotaru Tsubaki

アルファポリス文庫

https://www.alphapolis.co.jp/

第一話　狐の嫁入り　～祝いの和菓子～

卯月の終わり――ぱらぱらと軽い音を立てて雨が降るのを硝子越しに眺めていた。
時折、強く吹く風が硝子戸を叩き、ガタガタ音を鳴らす。透明な硝子に雨の雫が張りつく。巷ではまだ高価で珍しい硝子を使った店の出入り口。
わずかに歪んだ硝子を通して見えるのは、石畳の通りだ。石畳の上で雨粒が白く跳ねている。俺は雨粒を数えながら微睡んだ。
湿気で陳列台の木の香りが微かに漂い、それがまた心地よい。
遠くで雷のゴロゴロという音が聞こえ、うっすらと目を開けた。
俺の名は千年屋安海。
『名前をやすみとつけたのが悪かった』と親が後悔するほどの怠け者である。
そんな俺は和菓子屋の三代目。千年屋店主として働く――こともある。
「今年の春は雨が続くな……」
ニャアと猫が鳴く声が聞こえたような気がして、椅子から立ち上がった。重い腰も

猫に呼ばれると、反射的に動いてしまうのだから不思議だ。
裏の勝手口へ向かう。
本日、俺の仕事は猫のエサやりのみ――それで終わりだ。
猫にエサをやったら、俺は雨の降る庭を縁側から眺めて昼寝でもしよう。
桜は終わってしまったが、庭のツツジが朱や白、赤の花を咲かせ、庭を彩る。今が一番の見頃だ。
和菓子職人たる者、美意識を高めるため、花を愛(め)でるのは大事なことだ。たとえ、それが昼寝目的だとしても。
味噌汁の出汁(だし)に使った煮干しを小皿に取り、雨宿りしていた黒猫にやった。
今日の俺は頑張った。ちゃんと動いた。
「よし！　今日は人間らしい活動をしたぞ！」
毎朝やってくるこの黒猫は野良だと思うが、艶やかな黒の毛並みに緑色の瞳をしている。
こいつはどこかで飼われているのかもしれない。
野良のわりに丸々と太っていて、やたら綺麗な猫だ。
もしや、俺よりいいものを食べているのでは――いやいや、まさかな？
太り気味な黒猫は煮干しを食べ終わると、ぷいっと明後日のほうへ顔を向けた。

「おい……。そこは感謝の気持ちを表せよ」
エサをやっても喜ぶどころか、『ごくろうさん』とでもいうように、尻尾をちょっとだけ振って去っていった。
愛想のカケラもない猫だ。しかし、その堂々たる背中は嫌いじゃない。
無駄な愛嬌は振りまかぬ。
それが猫の生きざまというものだろう。
俺には俺の生き方がある。とくと見よ。俺の生きざまを！
「さて。昼寝をするか」
綿入り座布団をいそいそと手にした瞬間、店の硝子戸(ガラスど)が開け放たれた。店内に湿った空気が一気に流れ込んだ。空気だけなら良かったが、余計なものまで入ってきてしまったようだ。
「なにが昼寝だ。この無気力店主。働けよ」
「お前は知らないだろうが、今、俺は猫のエサやりという重大な任務を果たしたばかりだ」
「おおげさに言えば許されると思っているだろ。まだ正午のドンも鳴っていないってのに、とんだ怠け者だ」
正午のドンとは昼時を知らせてくれる大砲(ドン)の音だ。

その正午のドンも鳴らないうちにやってきたのは一之森有浄（いちのもりありきよ）という男で、俺の幼馴染だ。

近所の神社で神主を生業（なりわい）としている。

有浄は俺と会話をしながら、黒いコウモリ傘の雨粒を払い、店先でたたむ。そして、外の軒下にある竹の長椅子の横に立てかけた。

そして後ろ手で硝子戸（ガラスど）を閉めると、無言で俺と向かい合い、目で会話する。

無言の会話も幼馴染ならではだ。

『今すぐ帰れ』

『お断りだ』

有浄は目を細め、にっこりと微笑んだ。

――くそっ！　こいつ……できる！

長居するつもりでいるのか、帰る意思が見られない。チッと心の中で舌打ちをした。

「おい、有浄。なぜ俺の昼寝宣言が、店の外にいるお前に聞こえたんだ？」

「俺は陰陽師だからね」

出たよ、自称陰陽師。

「あー、そういう胡散臭いのは間に合ってるんで」

有浄はちょっとばかり……いや、かなり他の人間よりも変わっている。

明治が終わり、大正の世になったとはいえ、まだまだこの辺じゃ着物姿が主流。そんな中でも有浄はジャケットにベスト、ワイシャツとネクタイという西洋風の服装をしている。

正直、神主の装束姿より洋装姿のほうが馴染んで見え、『お前は外務省のお役人か貿易商かよ』とツッコミを入れたくなるほどだ。お前こそ、いつ神主の仕事をしているんだよ。

まあ、百歩譲って洋装は良しとしよう。個人の趣味嗜好だしな。だが、自称陰陽師はどうなんだ。胡散臭い上に怪しすぎるだろう。幼馴染でなければ、とっくに店の外へ追い出していた。

「悩み事があれば、陰陽師の俺に相談するといいよ」

「帰れ」

即決即断。俺の昼寝を邪魔する奴はすべて敵だ。

「俺を押し売り扱いするなよ」

「押し売りのほうがまだマシだ。もっと言えば、押し売りのほうが、俺にとって無害だ」

「うまい冗談だね。俺も無害だよ？」

なにが無害だ。どの口が言ってるんだ。微笑んだ有浄の顔にイラッとした。

「この間、俺はお前と女の痴話喧嘩に巻き込まれたよな。それに対する謝罪は？」
「痴話喧嘩じゃない。ちょっとした別れ話のもつれだ」
なにが『ちょっとした』だ。その日は雲一つない快晴だったというのに、急に雨が降り出した。さらに雷まで伴う大雨になり、強風まで吹き始めた。
天候を左右できる女は人間か？
それとも――いやいや、俺は絶対に関わらないと決めている。だから、余計なことを聞くつもりはない。
「美人だっただろ？」
「そうだな。お前と少し似ていたかもな」
有浄は日本人離れをした容姿をしている。色素の薄い瞳と髪、そしてすらりとした長身、近所でも評判の美男子だ。
赤ん坊の頃から、ぼんやり顔と言われている俺と大違いだ。
しかし、残念ながら有浄は陰陽師を自称しているせいで、胡散臭い男と思われ、『ぜひ、うちの娘を嫁に』という定番の流れにはならない。その有浄は長居をするつもりらしく、かぶっていた黒のフェルト帽を取った。
「おいおい、また新しい帽子を買ったのか？　こないだの帽子は茶色だったよな？」
「いいだろ。これ、イギリス製のフェルト帽でさ」

有浄がノリノリでフェルト帽自慢を始めそうになったのを手で制した。ここで止めなくては話が長くなる。
「帽子の話はいい。けど、神主が洋装ってどうなんだろうな」
「和菓子屋が書生姿っていうのもどうなんだよ」
俺と有浄はお互いの服装を見た。お互い本業から大きくかけ離れた格好だ。
「誤解されがちだけど、神主の時はきちんと装束を着ているからな？　多数の女性から装束姿も素敵ですっていう感想が山ほどきている」
「きてねーよ」
神主の時はってなんだよ。お前の自称陰陽師は仕事なのかよ。しかも、どさくさに紛れて、『装束姿も素敵』って言うな。
「お前の知らないところで女性に人気なんだよ」
「なにが人気だ。人間じゃねーだろ。人間に好かれろよ」
人間ならまだしも、こいつの場合は人間じゃない奴との付き合いが多すぎる。人間なのか、それとも違うものなのか、ぱっと見ただけではわからない。だが、有浄にはわかる。
だから、自称陰陽師なのだろうが――
「まぁ、安海。安心しろ。お前が作る和菓子は評判がいい。俺には負けるけど、人気

はあるよ」
「人間にな」
「いや、あやかしに」
「そういう胡散臭いお客様は当店ではお断りしております」
「客を選ぶなよ」
「選ばせろよ」
俺の商売相手は人間のはずだ。人間以外のものが集まる原因は有浄だ。
「わがままだな。あ、わかったぞ。頑固な職人は客を選ぶからだな」
「誰が頑固な職人だ！」
頑固な職人――それは俺のじいさんだ。道具を探し求め、全国を旅した和菓子職人の祖父。千年屋の初代店主は、和菓子に対する熱い情熱を持っていた。
俺はそんなじいさんの血を引いているはずなんだが、どこでどう間違えたのか、三代目無気力職人。俺、誕生。
「まあ、いい。茶と菓子を一つもらおうか」
「ない」
「……ここは和菓子屋だよな？」
「和菓子屋だ」

「商品のない和菓子屋が和菓子屋を名乗っていいと思うな！」
木製の陳列台には大福の一つ、団子（だんご）の一本も並んでいなかった。だが、俺は堂々としていた。なぜなら、やましいことなど、なに一つないからである。
「ちゃんと看板が出ているだろ？　千年屋ってな」
「看板を出しておけば、商品がなくても許されるとでも？　安海の両親は働き者なのに、どこをどう間違って、こうなったんだよ！」
両親は数年前に大陸へ渡り、上海（シャンハイ）で饅頭（まんじゅう）を売っている。
働き者の両親は上海で成功し、知り合いも増え、なかなかの暮らしぶりだとか。そんな両親から生まれた俺は働き者――にはならず、だらだらと生きていた。
「きっと安海っていう名前のせいだな」
「なるほど。安海だけに休みってことか」
「まあな。じゃ、そういうことで」
「いやいやいや、待てよ！」
俺がいそいそと座布団を抱え、奥の茶の間で昼寝をしようとしたのを有浄が止めた。
「お前の和菓子はあやかしに評判がいいんだよ。なにかないか？」
「……あやかしより人間相手に評判になりたいよ、俺は」
「なら、店を開けろ。それが嫌なら、あやかし相手に金稼ぎをしろ」

めちゃくちゃなことを言う有浄に、俺は座布団を盾のように構えて答えた。俺の安眠を守護する座布団よ、お前は俺の心の盾。

「わかった。とりあえず、昼寝をしてから考えよう。じゃあな、有浄。早く帰れよ」

やる気なし。今日の俺は昼寝をすると決めている。

座布団を抱え、立ち去ろうとした。だが、その瞬間、有浄は座布団を俺の手から叩き落として蹴り上げた。座布団が宙を舞う。

「あ……」

ちょうど店の硝子戸が開き、俺は短く声を上げた。

座布団を救うために、そいつは現れたと言っていい。

「むぶっ！」

和菓子を購入しに来た客――ではなく、幼馴染その二、兼岡兎々子の顔面に座布団がぶつかった。

「兎々子ちゃん。タイミングいいなぁ」

座布団を蹴り上げた張本人である有浄は、少しも悪びれた様子がない。顔面で座布団を受け止めた兎々子に大笑いしているのを見た時、俺は本気で、こいつを出入り禁止にしてやろうかと思った。

なにが起きたかわかっていない兎々子は、キョトンとした顔で周囲を見回し、首を

傾げた。

「どうして、座布団が飛んできたの？」

兎々子は鼻をさする。俺の大切な相棒、座布団を雨で濡れた地面に落ちないよう受け止めてくれた。

「有浄の仕業だ。兎々子、学校は？」

「今日の授業は午前で終わりだったの」

銘仙の着物は矢絣柄、海老茶の袴にブーツ、髪に大きなリボンをつけている。服装からわかるように兎々子は女学生だ。

有浄よりもマトモそうに見えるが、兎々子も俺にとっては迷惑度の高い存在である。無自覚な分、有浄よりタチが悪い。

「ありがとう。兎々子。俺の相棒を助けてくれて」

兎々子の手から座布団を受け取った。

「そして、さようなら」

そのまま外にぐいぐい押し出そうとすると、兎々子が猛烈な抵抗を見せた。

「なんでーっ！　私、お客様なのに！」

有浄のコウモリ傘の隣に和傘が置いてある。まだ雨は続いている。雨の中、女性を放り出すのか。そう思われるかもしれない。だが！

「悪いが俺は俺の平和を守り抜く！　断固として！　和菓子屋だけに団子としてな」
俺の渾身のネタを披露した。だが、有浄と兎々子には不評だった。
二人に冷たい目で見られ、気まずくなった俺はふいっと目を逸らす。お愛想で笑ってくれるような優しさはないようだ。
「そういうの考えなくていいから、安海ちゃんは和菓子を頑張ればいいと思うの」
「完全に同意」
「うるせーよ」
まっとうじゃない二人にまっとうなことを言われる俺。
「あーあ。せっかく和菓子を食べようと思ってきたのに陳列棚がからっぽか」
有浄はがっくりと肩を落とした。
「今日は作る気分じゃなかった」
「お前はどこぞの気難しい芸術家か。俺の甘いものを食べたい気分をどうしてくれるんだ」
「え？　有浄さんは甘いものを食べたいの？　ちょっと待ってね」
兎々子が着物の袂をごそごそ探り、黄色い箱を取り出した。その黄色の箱の正体は、子供から大人まで大好きなお菓子。
「ああ、ミルクキャラメルだね！」

箱入りのミルクキャラメルは、今流行りのお菓子で、偽物まで出回る始末。箱を見ただけでわかる有浄もミルクキャラメルの虜なのだろう。
「和菓子がないなら他のお菓子を食べればいいじゃない」
兎々子は得意顔でそんな台詞を言って、ミルクキャラメルをバーンと見せた。
「なんだ、こいつ。やっぱり帰れ」
「えーっ！　どうしてー！」
和菓子屋に和菓子を買いに来て、ミルクキャラメルを自慢する幼馴染。なにがお客様だ。これは敵襲だろ。
「だいたい洋食屋の娘が和菓子屋になんの用だ。冷やかしにでもきたか」
「冷やかしじゃないよー！　私の家は洋食屋だけど、朝ごはんはお味噌汁必須で納豆も食べるし、たくあんだって大好きな、完全な和食派なんだから！」
「うっわ。洋食じゃないんだ。それもどうなんだろうな」
洋食屋の朝はパンとオムレツを食べているとでも思っていたのか、有浄はショックを受けていた。有浄は洋装を好んでいるだけあって洋食好きの西洋かぶれ。兎々子の父親がやっている洋食屋『カネオカ』にもよく足を運んでいる。
「まあまあ。お一つ、あげましょう」
兎々子は俺と有浄の手のひらにミルクキャラメルを一粒ずつのせた。ちょうど小腹

が空いていたので、紙をぺりぺり剥(は)がして口の中へ放り込む。
ふむ、これがミルクキャラメルか。甘くて香ばしい味がする。
「うまいな」
兎々子を追い出そうとしていた俺だが、話題のミルクキャラメルをご相伴にあずかり、少し反省した。
「人気すぎて、偽物が出回るのもわかるよ」
兎々子はミルクキャラメルを口に入れ、有浄の言葉にうなずいた。
「でも、これは正真正銘の本物よ。百貨店で買ったんだから、間違いないわ」
「やだなぁ。兎々子ちゃん。百貨店で買ったからといって本物とは限らないよ」
「有浄さんはいつもそうやって茶化して。素直じゃないっていうか、疑り深いっていうか……」
「疑ってかかったほうがいいに決まってる。人の形をしたものが人であるとは限らない」
有浄がおかしなことを言い始めた瞬間、店の硝子戸(ガラスど)がガタガタと鳴った。俺の気のせいでなければ、雨が激しくなったような気がする。さっきまでうっすら射していた日の光が陰り、店の中が薄暗くなった。
「おい、有浄。お前のせいだぞ。変なことを言うから客が来た」

「お客様は大歓迎ってね」
「普通の客ならな」
有浄はにこにこしていた。そんな笑顔で歓迎するような客じゃない。
雨に濡れた硝子戸(ガラスど)に、歪んで映る人の影。いつの間にか、店の前に女性が一人立っていた。徐々にその姿が明らかになっていく。切れ長の目に涼し気な目元、妖艶な雰囲気。
たぶん、あれは人間じゃない。だから嫌なんだ。この二人を店に入れるのは――うんざりした気持ちで、店の前に立っている客を眺めた。
「呼んだ責任を取れ」
「俺が呼んだわけじゃないよ。ここが千年屋だからやってくる。さあ、お客様を招こうか！」
「今すぐにでも鍵をかけたいよ、俺は」
できれば、招きたくない。
店先に和傘(わがさ)を差して立っている女性は、見るからに怪しげだ。どこが怪しいのかというと、草履(ぞうり)が濡れておらず、泥が跳ねた様子もないことだ。雨の中、ここまで歩いてきたのなら、着物と草履(ぞうり)が多少なりとも濡れているはずだ。しかし新品のように美しい。これは、どう考えてもおかしい。

見惚れるほどの美人なのだが、どこか狐に似ていて、警戒心の強い俺は、素直に彼女を受け入れることができなかった。幼い頃から、トラブルに巻き込まれ続けて二十年以上。有浄と兎々子に警戒心を鍛えられた俺は、美人を見ても素直に喜べないひねくれものになってしまったというわけだ。

「うわぁ、美人さん！　それに素敵な着こなし……」

兎々子には人間に見えるようだ。

妖艶な女性の髪型は流行りの耳隠しにべっ甲のかんざし。赤い紅を唇に差し、白い藤の絵が描かれた黒地の着物は半襟を大きく覗かせ、今風に着こなしている。口元にはホクロが一つある。それが印象的だった。

女性は和傘を閉じると、兎々子の傘の隣に置き、店に一歩足を踏み入れた。俺の平穏がさらに遠のき、がっくり肩を落とした。

「こんにちは」

「あいにく今日は休みでして」

無駄な抵抗だとわかっていても、なんとか女性を追い返そうと足掻いた。そんな俺の心を見透かしたように、女性は口元に袖をあて、くすりと笑った。

「ここはいつもお休みですこと。ねぇ？　有浄様？」

「やっぱり有浄の知り合いか！」

じろりと有浄を睨みつけた。だが、有浄は俺の鋭い視線をハエ程度にしか思っていないのか、にこにこ笑い、気にした様子がない。

兎々子は俺の着物の袖をぐいっと引っ張って、目の前の妖艶な女性を目で指して、小声で言った。

「ねえねえ。安海ちゃん。すっごい美人さんよね。もしかして、有浄さんの恋人？」

どこをどう見たらそうなる。恋愛に繋げる前に、もっと警戒しろよと俺は言いたい。

だが、兎々子は現役の女学生だけあって恋愛話が大好きだ。憧れの先輩から手紙の返事をいただいたと大騒ぎしたり、少女雑誌を持ってきて、恋愛小説を読ませてきたりと、俺に恋愛のなんたるかを説いていく。

今、兎々子には贔屓にしている恋愛小説家がいるらしく、わざわざ人気画家の便箋まで買って手紙を送るのだと、得意顔で言っていたのを思い出す。しかし、手紙を送るのに新しい便箋まで買わなくてもいいのではと思う。なぜなら、兎々子は行く先々で便箋や葉書を購入し、山ほど持っているからだ。『前に買ったものから使えよ』と、俺が一言言っただけで、『朴念仁』と怒られた。そんな怒られるようなことか？

兎々子に言わせると俺は恋愛に関しては尋常小学校に通う子供以下の朴念仁らしい。

朴念仁――まあ、それは百歩譲って認めよう。だが兎々子、お前の目は節穴か？

女性は女性でも、それが人間とは限らない。人間かどうかくらいは、せめて見極めてくれ。

「私が浮気者な有浄様の恋人なんてご冗談を」

俺が答えられずにいると、女性が代わりに答えてくれた。そして、有浄は即座に反論する。

「俺が浮気者なんて人聞きが悪いな。俺は浮気者じゃないよ？　ただちょっとばかり女性が集まりやすいだけなんだ」

「人間以外のな」

「おっと、安海。俺の人気に嫉妬かな？」

有浄は額にかかる髪を手で払い、にやりと笑った。それが彼女の気に障ったらしく……いや、俺の気にも障ったが、女性の目が鋭くなった。思わず、俺は有浄の背中をどんっと手で押した。

「俺は関係ない。こいつのことは煮るなり焼くなりお好きにどうぞ」

「おい、親友」

「違う。腐れ縁だ。勝手に親友呼ばわりするな」

そして、俺と親しげに肩を組むな。迷惑そうに有浄の手を拒んでいると、女性は目を細めてほほっと笑う。ますます狐のように見えてきた。

「ご安心くださいな。私は千年屋さんをよく存じておりますの。それこそ、初代が店を開いた頃からのお付き合いですからね。お二人の関係もちゃんと理解しております」

「すごーい！　おじいちゃんの頃からのお客さんなんて、ありがたいよね？　安海ちゃん！」

兎々子は嬉しそうに手を叩いたが、俺は素直に喜べなかった。

じいさんが店を開いた頃からの客だと言った。だが、目の前の女性の外見年齢は二十代後半か三十代前半。なぜ、年を取っていないんだ。少しは疑問に思えよ、兎々子。

女性の年齢は聞くなってのは本当だなと思った。

俺はあえて、今の言葉を聞かなかったことにした。なぜなら、俺は有浄とは違う。自称陰陽師などと、胡散臭い肩書きを名乗っていない。ただの無力な和菓子屋だ。

「そうだな。ありがたいな。じゃ、俺はこれから昼寝をするんで」

ここで全員、まとめて追い出そう。俺はそう決めた。だが――

「今日は特別な注文をお願いしに来たんですの」

「特別？　いや、そういう注文は引き受けてな……いてっ！」

断るつもりが、有浄が俺をどんっと肘でつついた。それもけっこう強めで。

「実はね、八十八夜の後に、私の嫁入りがあるんですよ」
「わぁー！　お嫁入り！　おめでとうございます！」
兎々子がぱちぱちと手を叩いてお祝いの言葉を述べた。
八十八夜。つまり立春から数えて八十八日目ってことだ。
あと数日しかない。
春から夏に変わる季節。さわやかに吹く風の中、縁側で昼寝をする俺の姿が目に浮かぶ。昼寝をするには快適な時季だが、嫁入りにもちょうどいいのかもしれない。
「嫁入りはわかったが、急な注文は困る」
「あらあら。よろしいんですの？」
「ん？」
「昔、近所の柿の木から落ちたのを助けたでしょう」
「え、いや……」
「安海さんが川で溺れそうになって、岸まで運んだのをお忘れですか？」
「どうしてそれを？」
有浄と兎々子が俺からスッと目を逸らす。おい、諸悪の根源。
「いや、あのな。そもそも釣りに誘ったのが有浄で、柿が食べたいと言ったのが兎々子なんだが」

有浄の釣竿が流れていったのを見た俺は、釣竿を拾おうとして川岸から落ちて深みにはまった。それが運の尽き。うっかり釣竿ごと流されてしまった。だが、運良く岸に流れ着いた。
俺が柿の木から落ちたのは、兎々子が町内で一番うまい柿があると言い出したのが発端だ。嫌がる俺を無理矢理連れていき、人の家の柿の木に登らせた。
木登りは苦手だったが、兎々子を登らせるわけにはいかないと思ったのだ。だが、木から落ちた瞬間、やっぱり登らなければ良かったと後悔した。
骨折を覚悟したが、不思議なことに無傷で済んだ。あれは尻から落ちたおかげだと今まで思っていたが、どうやら違ったらしい。
幼馴染との懐かしい思い出の日々を振り返った。結論――俺の人生、この二人から離れたほうが平穏に暮らせそうだ。
「助けてくれたことは感謝する。けど、仕事をする気はない」
「命の恩人の嫁入りですものねぇ。きっと特別なお祝い饅頭を作ってくださるんでしょうね」
おいおい、なんだこの流れ。断っているのに、完全に無視されたぞ。しかも、いつの間にか俺が注文を引き受けることになっている。
「つまらないお饅頭だったら――」

一瞬、女性の顔が凶悪な狐に見えた。
「どうなるかわかっていますわね？」
「脅しかよ！」
「招待客の皆さんがいただいて嬉しいお饅頭をお願いしますわ。できますわよねぇ？」
「いや、できるもなにも、引き受けてな……」
「もちろんだよ！　なっ！　安海！」
断ろうとした俺の肩に有浄が手を置き、顔を近づけて耳打ちした。
「忠告だ、安海。この注文は引き受けたほうがいいぞ。この女性の機嫌を損ねると、面倒なことになる」
その面倒な女性を連れてきたのはお前じゃないのか。そう言いたいのをぐっと堪えた。なぜなら、有浄と兎々子を店の中に入れた時点で、俺の敗北は決定していたからだ。
「わかった……」
断るのを諦め、渋々承諾すると、女性は満足そうに笑った。
「嫁入り後も、皆さんが私を思い出してくれるようなお饅頭にしてくださいな」
女性は硝子戸に手をかけ、店の外へ出る。
「頼みましたよ」

肩越しに振り返り、念を押す。俺がうなずくのを見て安心したのか、再び雨の中に消えていった――
「よーし、安海！　頑張ろうな！」
「安海ちゃん、どんなお饅頭を作るの？　私にも味見させてね」
「お前らも帰れよ」
有浄と兎々子はやっぱり疫病神だ。俺の昼寝計画は早くも頓挫した。
狐顔の女性が去ると、さっきまでの雨が嘘のようにぴたりと止み、灰色の雲間から青空が覗いて見えた。石畳を日差しが照らし、雨水が眩しく輝いている。
硝子戸を空けると、ちょうど正午のドンが鳴った。
雨を避けていた人が石畳の通りを行き交い始める。着流し姿にカンカン帽をかぶり、早足で通り過ぎていったのは近所の尋常小学校で働く男の先生だ。
下宿屋に昼飯を食べに帰ってきたのだろう。
先生は無類の甘党で、千年屋の常連だ。店の前を通り過ぎる際、先生は歩く速度を緩めた。そして、陳列棚に和菓子がなにもないのを確認すると、がっくり肩を落とした。
昼寝をこよなく愛する俺もこれには少し心が痛んだ。そろそろ本気を出すか――そう思った時。

「おー、雨が止んだな。快晴、快晴！」
有浄は青空を見上げ、何事もなかったかのような明るい声で言った。少しくらいは俺を巻き込んで悪いと思えよ。
「さーて、俺も帰ろうかな」
「おい。帰るのはいいが、さっきの怪しげな客の正体を俺に教えてから帰れよ」
「俺の身内だよ。安海もよく知ってるはずだ。だから、特別な祝いの饅頭を作ってやってくれ。頼むよ」
「お前の身内で、俺もよく知っている相手？」
そう言われても、まったく思い出せない。
「長いこと俺といてくれたんだが、とうとう嫁に行くことになってさ。実は俺もお前に、祝いの饅頭を頼もうと思ってきたんだ。引き受けてくれて助かったよ」
「俺は助かっていないんだが？」
「引き受けたんだろ？　しっかりやれよ」
「誰のせいだ、誰の！」
「頼んだぞ。千年屋の三代目！」
こ、このやろう。怒りで拳を震わせていると、兎々子がジッとこちらを見つめていることに気づいた。

「なんだ。兎々子。俺の顔に飯粒でもついてるか？」
「安海ちゃん。お腹空いた」
「この流れでそれを言うか？」
有浄と兎々子は、なぜ俺を働かせようとするのだろうか。
「家に帰って、賄いでも食えよ」
洋食屋カネオカのオムライスはうまい。
鶏肉と一緒に炒めたご飯に、黄色い卵でふんわり包んだオムライス。卵の上には甘酸っぱいトマトソースがかかっている。思い浮かべただけで、お腹が鳴りそうだ。庶民にとって洋食はまだまだ贅沢品だ。
「私、安海ちゃんが炊いた小豆の善哉が食べたいなぁ」
「いいね。小豆は邪気を祓う。ちょうどいい」
二人がオムライスより善哉を要求してきた。なにがちょうどいいだ。俺にとって、お前たちが邪気そのものだよ。昼寝をするつもりだったのに、一睡もできなかった。それを今から取り戻したい。
「誰かさんたちに邪魔されたからな。俺は今から昼寝をするつもりだ。俺の言っている意味がわかるよな？」
「よし。わかった。やることがないなら、安海。善哉をごちそうしてくれ」

「わぁ、安海ちゃん。善哉を作ってくれるの？」
なぜそうなる。
会話が成立しないんだが、もしかして、こいつらと俺が存在する次元が違うのか？
「待て待て。誰が作ると言った？　確かに小豆は邪気を祓うと言われているが、俺は迷信じゃないかと思っているぞ」
「いや、安海が作る和菓子には邪気を祓う力がある」
「俺が作った和菓子に怪しげな付加価値をつけるなよ」
俺は有浄と兎々子の顔を交互に見る。
「断言しよう。俺の和菓子に邪気を祓う効果はない」
俺は疫病神の二人を前にして、きっぱり言い切った。俺の和菓子が邪気を祓うというのなら、お前たちを祓えているはずだからな。
「塩でもまいとけよ」
「塩じゃ駄目なんだ。安海が作る和菓子は特別なんだよ。できあがるまでおとなしく待っているから、うまい善哉を作ってくれよ」
「私は邪気とか塩とかわからないけれど……。安海ちゃんの餡は小豆の味が残っていて美味しいの。だから、私の善哉は大盛りでね！」
なにが大盛りだ。二人とも俺の話を聞く気がない。そして、二人は家の主の許可なく、勝手に茶の間に上がった。

「お茶淹れるね」
「あ、俺のお茶は渋めがいいな」
「いや、帰れよ。しれっと居座ろうとするな。それに、俺は小豆を炊く前は身を清めてからと決めてるんだ」
俺なりに手順がある。だが、有浄が真面目な顔で言った。
「知ってるよ。けど、今日は邪気を祓っておいたほうがいいかもね。客は客を呼ぶ。似たような客を招きたくないだろ？」
有浄に言われ、俺は百鬼夜行を想像した。夜中、異形が列を作り、店の前に並ぶ姿が頭に浮かび身を震わせた。
「やめろ！　これ以上、おかしな客を呼び込むな！」
最悪だ。面倒事が増えるのだけは避けなくてはならない。俺は渋々、襷を手にし、和帽子をかぶる。
「まったく……。なんの脅しだよ」
小豆を炊くための火は瓦斯を使う。
新し物好きな父親、千年屋の二代目は工場をいち早く今風に改築した。だが、じいさんは外観を変えることだけは絶対に許さなかった。だから、外観は昔のままだ。

じいさんは誰を待っていたのか、『誰がいつ来てもわかるように、店の見た目は変えたくない』と言った。道具だけでなく、人にも執着に似たこだわりがある人だった。

そんな強い信念を持つじいさんが選んだ道具の数々が並ぶ工場。工場には、竹製や籐製のこし器、鍋と杓子、焼き印と木型が棚に収められている。おかげで俺が道具を新たに購入する必要はない。

水に浸けてあった小豆を鍋に移し、マッチで瓦斯の火をつける。青い炎が揺らめいたのを確認し、鍋をかけた。鍋は何度も小豆を炊いているせいで、色が変わってしまった。木製の杓子もそうだが、道具は丈夫でしっかりしていてまだまだ使える。

「さすが安海のおじいさんだね。ここにあるのは、いい道具ばかりだ。使い込まれた道具には神が宿るっていうから、大事に使うといいよ」

「有浄、ちょっと黙ってろ。面倒なことが起きそうな気がして怖い」

「はいはい」

鍋の中の小豆が膨らむのを見ていると、同じくらい真剣な目で、俺の手元を眺めている二人。

正直、やりづらい。

「あんまりジロジロ見るなよ。茶の間で昼寝でもしてろよ」

「えー、だって安海ちゃんが作ってるところを見ていたいんだもん」

「そうそう。安海が作っている姿は神事のようだからね」

兎々子は有浄に同意しなかったが、頬杖をついて、待ち遠しそうにわくわくした顔をしていた。その表情で、善哉をどれだけ心待ちにしているのかがわかる。

鍋の中の水が減ってきたので水を足し、沸騰したのを見て、水を捨てる。そして、また水を入れる。それを繰り返す。小豆が柔らかくなるのを見計らい、ザルにいったん上げた。

まだ砂糖を入れてないのに、炊いた小豆の香りは甘い。甘い香りを含む白い湯気が顔にかかった。

幼い頃、甘いと思ってこっそり食べた小豆は、いつも甘くなかったことを思い出す。記憶の中のじいさんは笑っていた。

水を切った小豆を鍋に戻し、水と砂糖を入れてさらに煮る。今日は餡を作るわけではないので、ここまでだ。

「安海ちゃん。そろそろできあがるよね。お茶碗を出すね」

兎々子が勝手知ったるといった様子で、木製の塗り椀と塗り箸を棚から取り出した。有浄は湯呑みを持って茶の間へ行く。手際のいい二人を見て不安になった。まさかとは思うが、俺の家のすべてを把握しているんじゃ……？

砂糖を加えた鍋の中の小豆が艶を増し、濃い紫色に変化する。ようやく善哉が完成

した。煮えた小豆を食べると、ちょうどいい甘さだった。
これで汁は完成したが、善哉には餅が付きものだ。
餅粉に少しずつ水と塩を加える。ほど良い固さになったところで、これを丸め、沸騰したお湯に丸めた餅を落とす。ぷかりと浮かんできても焦らずしばらく待つ。中まで火が通り、しっかり煮えたのを確認する。それから餅を椀の中に入れる。
「できたぞ」
俺の声に兎々子がぴょんっと飛び跳ねて、椀の中を覗き込んだ。
「美味しそう！」
「うん。小豆のいい香りがする。茶の間に運ぼう」
有浄と兎々子は完成した善哉の椀をお盆の上にのせると、茶の間にある卓袱台まで持っていった。
一仕事を終え、和帽子と襷を外した。後片付けは後だ。できたての餅に甘い汁をよく絡ませ、熱々でいただくのがいい。
「安海ちゃんが作った善哉を食べるのは、お正月以来よ！」
「善哉だけによきかな、よきかなってね」
善哉を前にして大喜びしている二人だが、ここで俺は大事なことを言っておかねばならない。キリッとした顔を作り、厳かに告げた。

「いいか。俺はこの後、昼寝をするんだからな。食べたら帰れよ」
今日一番大事なことを俺は言った。だが、二人はせっせと善哉を食べていて返事がない。
「返事をしろよ……」
「おいしーい」
「小豆がふっくらして美味しいな。これはいい小豆だね」
俺が求めているのは善哉の感想ではない。小さくため息をつき、椀を手にした。椀を顔に近づけると、幼い頃から慣れ親しんだ小豆の香りがした。
ふっくらした小豆と甘い汁。口の中で塩気のきいた餅と汁が絡み、甘すぎずちょうどいい。
雨が降り、肌寒さを感じていた体が、腹の中からじんわり温まり、ホッと一息ついた。有浄と兎々子も、俺と同じように顔の表情を緩め、ゆったりした時間が流れた。
「それで、安海。祝いの饅頭だが、どんなのにするつもりだ？」
「うーん……」
普段なら、じいさんが買った『祝』や『寿』の焼き印を使い、祝いの饅頭にするのだが、特別なものと言うからには、定番のものでは満足してもらえない気がする。
「満足のいくものにしてやらないと後々、祟られるぞ」

「おい、物騒だな」
「うまくいけば、商売繁盛。お稲荷様のご加護があるだろうよ。頑張れ！　安海！」
なにが頑張れだ。有浄は完全に他人事だ。お前が諸悪の根源にして、元凶なんだぞと言ってやりたい。だが、言ったところで有浄がなにかできるわけでもない。諦めて、頬杖をついて目を閉じる。このまま、いっそ眠れたら――
「もぉー。有浄さんったら！　お稲荷さんって狐のことでしょ？　さっきの女の人を狐なんて言っちゃ駄目！　有浄さんはすぐに人をからかうんだから！」
眠れなかった。兎々子の声が耳にキーンと響いて目が覚める。
「いや、狐なんだが……」
「安海ちゃんまで！」
兎々子にあやかしを見る力はない。いや、見えてはいるのだが、兎々子の目は別のものに変換してしまう。さっきの女性も狐ではなく、美しい人間の女性として見えているのだ。
「俺も安海もからかってないよ。俺たちは正直に言っただけだよ」
ははっと有浄は笑った。
「兎々子ちゃん。人の形をしたものが、本当に人かどうかなんて確かめる方法はないよね？　君が人だと思って見ているものが、実は人じゃない可能性も――」

「ぎゃーっ！」
兎々子が有浄に座布団を投げつけた。ばふっと音を立て、有浄の顔面に座布団が直撃した。俺の大事な座布団が畳の上に落ちる。
「もうっ！　怪談はやめてよ！」
有浄が唯一高い評判を誇る顔。その顔に座布団を投げつける奴は兎々子くらいだ。俺は、相棒である座布団を『よしよし、怖かったな』とすばやく保護した。座布団の投げ合いなどさせるか。まったく、俺の相棒になにしてくれるんだよ。
俺が有浄を庇わず、座布団を保護したのを見て、有浄は渋い顔をしていた。
「兎々子ちゃんは恐怖心を和らげるため、無意識のうちに綺麗なものや可愛いものに変換しているんだろうね」
「別にそれでいいだろ。本当の姿を知ったところで、得をするものでもないしな」
「まあ、そうだね。否定されるよりいいか」
有浄は俺の言葉に納得したようで、善哉の汁をすすった。綺麗なものや可愛いものか――
「兎々子。お前なら、どんな饅頭がいい？」
「私？　私がもらうなら……」
兎々子はうーんと唸りながら天井を仰ぐ。天井の木目を数えているのかと疑うくら

い長く考えてから、兎々子は言った。
「それって、お見合い連敗中の私が答えていいもの？」
「悩んだ末に着地がそこかよ。お見合いを勝負事みたいに言うな」
「兎々子ちゃん。また失敗したのか！」
有浄が噴き出したのを兎々子は見逃さない。兎々子はムッとした顔で、有浄を睨んだ。不穏な空気を察知し、二人が喧嘩しないように、俺は間に割って入った。これ以上、俺の平穏を乱さないでくれ。
「今度はなにをやらかしたんだ。仲人さんの着物の裾を踏んづけたのか？　でかい腹の音でも鳴らしたか？」
「もー！　やめてよ！　昔の私とは一味も二味も違うんだから。昔の失敗は繰り返しません」
「失敗を繰り返した結果、お見合いが全滅に終わってるんだけどね」
兎々子は声を張り上げた。
「私の話を聞いてください！」
「どうぞ」
「あー、はいはい」
有浄と俺はまたどうせくだらない失敗なんだろうなと思っていた。ドジを絵に描い

たような兎々子。今回はなにをやらかしたのだろうか。
「両親はね、今回のお見合い相手をすごく気に入っていて、気合いが入っていたの」
「ほう」
「へぇー」
俺と有浄が気の抜けた合いの手を入れたからか、兎々子は卓袱台をバンッと叩いて威嚇してきた。俺たちはネズミかハエか？
「私のお見合い相手はね。帝大に通っていて、末は博士かお大尽かって大騒ぎ。これはもう娘に熨斗をつけてでも、嫁にやろうっていう勢いだったの」
「帝大なら卒業したぞ」
「博士にもお大尽にもならなかったけどね」
なぜか兎々子は、俺と有浄を冷たい目で見た。
尋常中学校を卒業し、周りに勧められ第一高等学校に入学した俺と有浄。卒業すれば自然な流れで入学するのが帝国大学だ。同級生は博士や医者になったり、大陸に渡り政府関連の事業をしたりと、華々しい活躍をしている人間が多い。
そんな中で、俺と有浄は和菓子屋と神主になったわけだが、その理由としては、大勢の人間と仕事をするのが面倒くさ……いや、俺は千年屋の一人息子だ！
店を継がないわけにはいかないと、上海に行ってしまった親父の代わりに、三代目

として立派に働いている。
「二人は卒業しただけよね」
さらっと失礼なことを兎々子は言った。だが、大正解。悲しいことに俺と有浄は、なんの反論もできなかった。
「二人の学歴はどうでもいいの」
「あ、そう……」
「どうでもいいとか言われちゃったよ」
卒業しただけで、役に立たなかった俺たちの知識と学力。今のところ、立派な肩書きは使う予定がない。というか、一生なさそうだ。
「そういうわけで、両親はいずれ私が奥様になるかもって、夢を見たの」
「夢を見る前に現実を見ろよ」
「兎々子ちゃんが政治家や実業家の奥様になるってこと？　向いてないと思うけど」
「二人とも黙ってて！」
兎々子に怒られてしまった。
「それで、張り切った両親は私に座って待っているように言ったの。余計なことをして失敗しないようにね。だから、私は正座をして相手を待ってたの！　決戦前の心境でね」

決戦と聞いて、俺の頭の中に宮本武蔵の姿をした見合い相手、佐々木小次郎の姿をした兎々子が思い浮かんだ。
「そこまでは良かったのよ。でも、仲人さんがやってきて、挨拶をしなきゃって立ったら、足が痺れていて……うまく立てなかったの！」
「転んだのか？　けど、転んだくらいじゃ破談にならないだろ」
「転ぶ前に、仲人さんの帽子をとっさにつかんだら、帽子が外れちゃって」
「あ、兎々子ちゃん、それは……」
「髪の毛がなくて、鏡みたいな綺麗な頭をしていたの！」
うわーんっと兎々子は畳の上に伏せて泣き出した。赤いリボンが震えていた。
「つまり、兎々子は相手より仲人の頭をずっと見てたってことか」
「そんなの見ちゃうよ……。だって、鏡みたいなんだもん。もうちょっとで景色が映りそうだったんだから！」
「なるほど。兎々子ちゃんは頭が気になりすぎて、お見合いどころじゃなくなったと……」
「そう。お見合いの間、ずっと相手より頭が気になって、そっちに目がいっちゃったの。最初から隠さずに見せてくれたら良かったのに！」
先に出しとけとか無茶ぶりもいいところだ。兎々子のお見合いは大抵、こいつのド

ジに始まりドジに終わる。

だが、まだ今回は平和なほうだ。

確か、前回はお茶菓子が宙に舞って、それを隣の家が飼っている猫に奪われた。兎々子はお茶菓子を取り返すべく猫を追いかけ、乱闘するという醜態を演じた。お茶菓子を諦めればいいものを全力で追いかけたせいで、髪はぐちゃぐちゃ、せっかくの着物はボロボロ。一部始終を見ていたお見合い相手から、結婚をお断りされたというわけだ。

兎々子は『見た目で判断してほしくないわ』などと、わけのわからない供述をしていたが、ハゲを笑った時点で、兎々子も同罪確定だ。

「お前の見合いの失敗談はいいから、女性が喜ぶようなものってなんだ？　なにか言ってみてくれ」

「私なら、お花とかリボンがいいわ」

「兎々子ちゃん。そんなの俺でも思いつくよ」

「むっ！　じゃあ、有浄さんはどんなお菓子がいいっていうの？」

「それは安海が考える。俺は神主で専門外だからね」

「ふ、ふーん。他力本願ね」

「適材適所だよ」

二人の会話を聞いていたが、まったく参考にならなかった。

「定番の饅頭を特別なものにするか……」

卯月も終わりで、今さら牡丹や桜、山吹もおかしい。では、皐月のものをと考えたが、しっくりこない。初代が書き記した千年屋菓子絵図帳をぱらぱらとめくった。千年屋菓子絵図帳は、じいさんが菓子の絵を描き、名前を記したものだ。千年屋が今まで作った菓子の記録である。それを一通り眺めて閉じた。

やはり、嫁入りの祝いにはめでたい紅白の薯蕷饅頭がいい。芋を入れ、もっちりとした生地に小豆餡。餡を入れたら、丸く形を整えて蒸し、『寿』の焼き印を押す。

「普通の紅白饅頭だと駄目なんだよなぁ……」

「赤と白はいいんじゃないか。めでたいことだし」

有浄が濃いめの緑茶を飲みながら言った。気がつくと兎々子がいない。

「あれ？　あいつ、どこ行った？」

「ここにいるよー！」

兎々子が狐のお面をかぶって登場した。手にでんでん太鼓を持っている。謎の組み合わせである。

「おい……。祭りでも始める気か？」

兎々子はガラクタが入った木箱を持ってきて、どんっと俺の目の前に置いた。

「これでなにか思い浮かばないかと思って」
兎々子はガラクタを取り出した。ごちゃごちゃしていて目が忙しい。
「いや、遠のいた」
「えっ、嘘！」
箱の中にあった提灯をばふばふさせながら、俺はうなずいた。
これは、じいさんが夜道を歩く時に使っていたものだ。明治までは夜道を照らしていた提灯も今では瓦斯灯にとって代わられた。瓦斯灯が普及する前の夜は、道行く人が石畳の通りを蜜柑色の灯りで照らしていた。淡い灯りが店の前を通り過ぎていくのを目にしたものだ。
昔は今よりもずっと闇が濃く、形がはっきりと見えない時代だった。人ではないものたちは、今よりずっと自由に生きていただろう。狐面を眺めていると、狐も兎とまではいかないが、よく見れば可愛い気がしてきた。
「狐も悪くないか」
「安海ちゃん。もしかして、なにかひらめいた？」
兎々子は狐面を外した。兎々子が我が手柄と言わんばかりの得意顔をしていた。
「ああ。これでいく」
「お面？」

狐面は木製で、表面に白い紙を貼りつけたなんの変哲もないお面。それをじっくり観察する。
「どんな饅頭にするか決めた」
「そうか！　安海がやる気になって良かった。これで俺は枕を高くして眠れるぞ」
有浄なりに心配してくれていたのか、ホッとしたように息を吐き、胸をなでおろした。そして、有浄はフェルト帽子を手にして頭の上にのせた。やっと帰る気になったようだ。
「兎々子。ガラクタが入った木箱は元の場所に片付けておけよ」
「はーい」
兎々子は木箱をひょいっと持ち上げて、じいさんが使っていた部屋に戻しに行く。その後ろ姿を見送ってから、帰ろうとしていた有浄を呼び止めた。聞いておかなくてはいけないことがあったからだ。
「おい、有浄。帰る前に一つ聞いてもいいか？」
「うん、いいよ」
有浄が革靴を履き、爪先で地面を叩く。
「あの狐はどこの狐だ」
俺を助けたと言っていた狐。その素性くらい知っておいても損はない。

有浄はにやりと笑った。なんだ、その悪い笑みは。こいつもあやかしではないかと思う時がある。有浄が生まれた時から知っている近所の人間ですら、こいつのことを狐憑きじゃないのかと疑っているくらいだ。

「お前もよく知っている狐だよ」

「俺が知ってる狐？」

「嫁入り行列が終わってから、俺の神社に来ればわかる」

じゃあなと有浄は手を上げ、竹の長椅子に立てかけてあったコウモリ傘を手にした。

「安海。善哉、うまかった。やっぱりお前が炊く小豆が一番だ。お代は確かに置いたぞ」

そう言うと硝子戸を後ろ手で閉めて、有浄は去っていった。深くかぶった帽子で、あいつの顔がよく見えなかった。

「いつの間に」

陳列台の木の棚に金が置いてある。だが、金を置いたのは今ではない。俺と話している間、財布を一度も出していなかった。それにあいつは一度も陳列台のそばに近寄っていない。

最初から、有浄は善哉を食べて帰るつもりだったのだ。俺はまんまと有浄の術中にはめられ、善哉を作ってしまったというわけだ。

「陰陽師か。本当にろくでもない商売だな」

俺は多すぎるお代を手にして、ため息をついた。迷惑料込みというわけらしい。わかっているくせに毎回巻き込むんだからな。やれやれと肩を落とし、ため息をついた。

そして、次は兎々子だ。兎々子は帰り支度をしていた。

「安海ちゃん。私も帰るね」

「ああ。気をつけてな」

「お饅頭、私の分も作ってくれる？」

「ああ。それで兎々子。お前はなんの用事があったんだ？　有浄のように善哉を食べに来たわけじゃないだろう？」

さっきまで笑顔だった兎々子の顔が凍りついた。

「おい、なんだ。その顔は……？」

嫌な予感がする。

「た、大変！　お父さんに豆大福があったら、買ってくるよう頼まれていたの！」

「ないぞ。今日はもう店じまいだ」

なぜなら、今から俺は昼寝をするからだ。これは決定事項だ。善哉を作ったことにより、俺のやる気と体力はなくなった。

「お父さんに叱られるわ」

「安心しろ。いつものことだ」
「習い事があったのも忘れていたわ。どうしよう……。今日は晩御飯抜きかもしれないわ。今日はコロッケにするってお母さんが言ってたから、楽しみにしてたのに……」
「さすが洋食屋だな」
なお、俺の晩飯は朝の残りご飯でお茶漬けだ。もう俺はなにも作る気力が起きない。
兎々子は頭を抱えていた。
「正座してコロッケの匂いだけなんて、そんなの地獄すぎるわ！」
「仕方ない。これをやるよ」
隠してあった羊羹を兎々子の手に持たせた。これはなにかあった時に使う羊羹だ。
そうそうなにかあっても困るが、なにかと必要な時があるのだ。
「安海ちゃん、もらっていいの？」
兎々子は茶色の竹の皮に包んだ羊羹を大切そうに両手で受け取った。
「お前の親父さん。甘いものが好きだからな」
「そうなの。でもね、お父さんが一番好きなのは、昔から食べてる千年屋の和菓子なの」
そう言うと、兎々子は俺に羊羹のお代を渡した。羊羹を手に入れた兎々子はにこりと笑った。

「じゃあ、帰るね！」
兎々子は意気揚々と店の硝子戸を開けた。そして和傘を手にする。
「おかげで晩御飯抜きにならずに済みそう！　ありがとう、安海ちゃん！」
「そうか。良かったな」
兎々子は元気良く手を振り去っていった。一人残された俺は狐面を手にして呟いた。
「狐と饅頭か」
雨上がりの澄んだ空気を吸い込んだ。石畳の道を子供たちや物売りが通り過ぎていく。人の往来を眺めて目を閉じた。あの中の誰が人間で、人間じゃないのかわからない。わからなければ同じもの――けれど、俺には関係ない。
俺は和菓子職人で陰陽師ではないからだ。
軒先から落ちる雨水が雫となって足元に落ち、水溜まりに波紋を描く。石畳とはいえ、端のほうは茶色の土が見え、緑の雑草が伸びている。
春だ。春の陽気が俺の眠気を誘う。
「さて、昼寝をするか」
うーんと伸びをして、また店の中に戻った。
今度こそ、誰にも邪魔されず昼寝をするために。

＊　＊　＊　＊　＊

八十八夜を過ぎ、皐月に入ってすぐのこと。

黒留袖姿の女性が朝早くにやってきた。やってきたのは注文に来た女性と別の女性だった。似ているものの、口元にホクロがなかった。こちらの女性は泣きボクロが印象的だ。髪を高く結い上げ銀の簪を差している。

人ではないだろうなと思ったが、俺は余計なことは一切言わない。厄介ごとに巻き込まれるのはごめんだ。

「千年屋さん。先日頼んだ者の身内ですが、約束のものを受け取りに参りました」

着物から覗く白い手は美しいが生気が感じられない。たとえるなら、白い陶器のような手だ。その手をこちらへ差し出した。

「もちろん、できている」

仕上がった紅白饅頭は箱に入れ、まとめて風呂敷に包んである。

「中身は開けてのお楽しみですか」

「ああ」

返事をして、白の襷を外した。夜も明けないうちから作業していたせいで眠い。

寝起きから風呂に入り、身を清めて餡を炊く。餡を炊く日は、決まった手順を踏まないと落ちつかず、一つでも狂うと満足のいくものに仕上がらない。

大量の餡を炊くと、白い湯気で工場の中は窓硝子が曇る。それくらい工場は暑い。餡は鍋から音が聞こえてくるようになるまで、気長に水気を飛ばし、小豆を煮詰める。耳を澄まして音を聞けば、仕上がりの固さがだいたいわかる。こればかりは経験だ——と、俺のじいさんが言っていた。

「今日、お嫁にいく私の妹は初代の頃から、ここのお饅頭が大好きだったんですよ」

「それはどうも。じいさんにはまだまだ及ばないけどな」

じいさんが言う餡の音もよくわからない未熟者だ。

「ほほほ。初代さんはなかなかの腕前でしたからね。ここの者は千年屋のお饅頭が供えられると喜んだものですよ」

供えられたら……ね。そこは聞かなかったことにしよう。俺は無表情でうなずいた。

さて、仕事は終わった。俺は寝よう。欠伸を一つした。

「確かにお品はいただきました。急にお願いした分、お代は弾んでおきましたよ」

渡された代金は俺が思っていたよりもずっと多かった。この金が木の葉に変わらなければだが。

「どうも……」

黒留袖の女性が姿を消すと、薄暗く感じていた店の中が明るくなった気がした。
「こないだの狐も厄介そうな手合いだったが、今日の狐もなかなかだったな」
完璧な人の姿をしていたが、やはりどこか人とは違うのだ。そして、俺は前回の狐も今回の狐も——正体はもうわかっていた。だが、面倒なことには関わらないほうが吉。後は有浄がなんとかするだろう。
「大仕事も終えたことだし、寝るか」
俺の人生で一番充実している時間がやってきた。それは昼寝の時間だ。店の硝子戸に鍵をかけようとした時、ちょうど兎々子がやってきた。
「安海ちゃん。お疲れさま。お饅頭できた？」
「俺が疲れていると思ってるなら、休ませてくれよ」
「そうしてあげたいけど、有浄さんに嫁入り行列を見たいなら、これをつけてくるように言われたの。安海ちゃんの分も預かったから持ってきてあげたのよ」
まだ朝飯も食べていない俺になにをさせようというのか、兎々子が差し出したのは狐面だった。
「なるほどな」
「有浄さんがね、お嫁さんは私たちと知らない仲でもないから、見送ってあげてって言ってたの」

知らない仲ではないと言われ、俺は天井を仰ぐ。あの女性は俺や兎々子のことを幼い頃から知っているだけでなく、有浄にとっては家族みたいなものだ。兎々子に狐面を渡したのは、有浄が一緒に見送ってほしかったからかもしれない。
「わかった」
俺は兎々子から狐面を受け取った。
「じゃあ、行くか」
店の出入り口近くに立て掛けてあった和傘を手にした。
「こんなに天気がいいのに、傘を持っていくの？」
「雨が降るからな」
「そう？　とってもいいお天気だけど」
俺と兎々子は狐面を頭の上にのせ、外に出る。
石畳の通りを歩く。途中ですれ違ったのは、カンカン帽子をかぶった尋常小学校の先生だった。狐面をつけた俺と兎々子を不思議そうな顔で眺めていた。夏祭りでもないのに、お面を持ち出し、なにをしているのだろうと思ったに違いない。
子供たちとも出会ったが、からかったり、馬鹿にしたりする子供はいなかった。なぜなら、あまりの怪しさに怯えていたからだ。からかわれずに済んで良かったが、子供たちの怖がる様子を見て、複雑な心境になったのは言うまでもない。だが、外すわ

立ち読みサンプル
はここまで